

# REVITALIZE MANUFACTURING

## 再興！日本のものづくり

中小ものづくり企業の成長を後押しする取り組みを行っている方々を取材するシリーズの第一弾。前編に引き続き、ゲストを大阪産業創造館の田邊様をお迎えし、中小企業のDXについてお話しします。

TEXT BY SHU TAKEHANA

TEXT&LAYOUT& DESIGN BY MIKI SUGIMOTO

### Vol.1

#### 公益財団法人大阪産業局 大阪産業創造館 [後編]

##### 中小企業のDXは身近な一歩から

田邊： 角淵さんとお話させて頂いて、「経済産業省の掲げているDX（デジタルトランスフォーメーション）は難しい」という点について同じ意見でしたね。DXはそもそも抽象度が高い概念で理解するのも一苦労です。しかもそれを実行するとなるともっとハードルが上がるので、中小企業は二の足を踏んでしまう面がありました。だから、中小企業とDXの関係を考えた時には、まずはIoTにプラスαぐらいのステップから始めるべきではないのかな、と感じていました。もしかしたら「それはDXじゃないよ」と言われるかもしれませんが、まず一歩デジタル化を進めない限りは、企業存続の問題に関わってくると思います。

DXに関する取材に行って分かったことは、現時点でDXの取り組みがある程度進んでいる企業というのは、5～10年前にデジタル化に着手して何かしら社内の反発で1回頓挫している経験を持つ企業が多いんです。そしてその後に成功している。

角淵： そうなんですか。

田邊： はい。やっぱり現場では、何か新しいものを導入するとなった際「自分の作業が増えるのでは」という懸念が生まれ、反発が起こったりするんですね。その失敗から「丁寧にメリットを伝えないと、現場は動いてくれない」というのを経営層が肌で感じていて、もう一歩現場での理解が得られるような具体的な策に落とし込んだことで、DXが実現できている企業が多いように感じています。

他の要因としてはリーマンショックの影響も大きかったのかなと。「このままでは危ない」と危機感を持たれて事業変革としてDXを進めた企業もあります。

角淵： 特に大阪だと、大手電機メーカーがリーマンショックの後、下請けをだいぶ切って中国・東南アジアへシフトし



ましたもんね。

田邊： そうですね。変化に対応した企業は今すぐうまくいってるので、このコロナ禍もチャンスと捉えたらチャンスですよね。「今が変わる時」という意味では、逆に追い風ですらあるのかなと感じています。

角淵： 確か大阪府は、東京や愛知に比べると社員 19 人以下の小規模企業が多いんですよね。東京だと中小企業のうち約二割なんですけど大阪は約八割だったと記憶しています。

田邊： まだ正解がわからないのは、その小規模企業などが、どこまで何ができるのかということですね。取材していると、50 人以上ぐらいの製造業だと DX はある程度うまくいっているような気がします。おそらくある程度の投資が可能なのでシステムと機械を連動させながら進められるのでしょうか。小規模企業の場合は勤怠の管理とか帳票関係とか、簡単でお金のかからないところから取り組んで「あ、これ楽になるんだ」と少しずつ実感しながら、設備の方に徐々にお金を投じていくみたいな入り方をしないと、いきなり大きな出費というのは難しいですね。

角淵： 小規模企業同士がユニオンを作って大きな仕事を受けるといったやり方も良いのではないのでしょうか。私の知っている金型製造メーカーはそういった取り組みを行っているのですが、従来は小型の金型しか受注できなかったのを、小規模企業が集まることで、300 トンクラスの金型を受けられるようにしたという例があるんですね。1 社では無理だけどみんな集まったら可能になる、というのがあると思うんです。

田邊： なるほど。

## ロボット Sler と要件を整理する

田邊： また、IT 人材を内部化するか外部化するのかという

問題もありますね。エフエイ・コムさんは中小企業に営業されるとき、どれぐらいの専門用語を用いるのでしょうか？

角淵： 私たちは目の前の方に通じる言葉、通じるプレゼン、通じる会話をベースに置いていますので、難しい言葉で着飾ってというのは基本的にやりません。わかっていないまま進めてしまうと、どこかで噛み合わなくなってお互いに気まずくなりますからね。

うちはできるだけ最初にゴールをお客さんと合意形成してから進めるか、ゴールが曖昧だったら「どんなものを作るか」という設計図や構想を一旦成果に置きましょうとご提案しています。動く装置がお金を払う対象だって思ってもらっちゃう方も多いのですが、どんな装置やシステムが出来上がるというのをドキュメントに落とし込むのはすごく大事なことでして、それを見て「これならいくら出します」となるわけです。だからお客さんの状態に応じて、構想を一つの納入品とさせて頂くビジネスをいま進めています。

田邊： ロボット Sler に求めることってそこだと思うんですね。私が前職で広告業をやっていた時もそうでしたが、お客様は商品の訴求ポイントを「これも、あれも」とたくさん挙げてしまうんですね。ロボット導入も同様に「せっかく導入するならあれもやりたい、これもやりたい」という声があがると思います。でも必要性や優先度をきちんと整理してあげる必要があると思うんです。全部満たせばそれだけ高額になりますし、ハイスペックすぎて使いきれないことにもなりかねません。「まずはこれから取り組みましょう」と具体的に提案して、その費用対効果からうまく話していけばお互い納得しやすいのかなという気がしています。

## DX 推進の今後の課題



角淵： 大阪府内企業ならではの課題などはありますか。  
田邊： そうですね、テレワークの導入は、コロナ禍で中小企業は4割程度だったようです。大手企業は8割ぐらいで、中小企業との大きな開きがあります。ただし、機械の遠隔管理・監視はできるようになってきているので、中小企業においても設備にベタ付きする必要はないのと、何かしら作業のログなどを取られているはず。誰かと入れ替わっても業務を引き継げ、技能伝承などにも関わってくるような気がします。

角淵： そうですね。リモートでデータを見られるようにすることと、属人化しないことはまさに弊社の行っている事業そのものです。

田邊： あと、組織風土の問題をどうしたらいいのかなと思いますね。DXの導入の際は「我が社としてここまでやる！そして実務は担当者に任ず」というトップの方向性と現場への権限委譲が必要です。一方で、社内で「DX推進を担当します」と手を挙げると、追加の業務が降ってきそうなので手を挙げませんという声を聞きます。DX推進業務が一部の人材に偏りがちになって、しんどくなるのでやり手がいなくなるという、「DXあるある」の状態です。

角淵： 中小企業の場合は特に若手でそこそこ仕事ができる人に業務が集中してしまいますもんね。そしてその人がいなくなるとDX関連装置が止まると。

田邊： そうなんです。属人化しないで済むように見える化したはずが、結果的に属人化していたっていう矛盾が起きるんですね。その辺が今後の課題になるのかなと思います。だから、DXを推進するうえで組織のマネジメントがいるのではないかと思います。大手企業はDX推進室のような専門部署を設けられますが、中小企業は業務を兼務することが多いです。そうした課題を解決していくためのセミナーやプログラムを検討していきたいと考えています。

## ACCESS

大阪産業創造館のご案内



公益財団法人 大阪産業局 大阪産業創造館

住所： 〒541-0053 大阪市中央区本町 1-4-5  
大阪産業創造館 13F

お問合わせ総合窓口： 06-6264-9800

公式HP： <https://www.sansokan.jp/>



## Yohei Tanabe

田邊 暢平 (たなべようへい)

公益財団法人 大阪産業局  
大阪産業創造館 ものづくり支援チーム

## INTERVIEWER PROFILE インタビュアープロフィール



## Hirokazu Tsunobuchi

角淵 弘一 (つのぶちひろかず)

株式会社オフィスエフエイ・コム 西日本事業所所属

本年経産省が推進するDX政策に関連し各自治体が主催するセミナーに講師として複数登壇。30年以上大手FA機器メーカー(㈱キーエンス)に所属し、FA機器の企画開発に従事。製造業のIoT化やトレーサビリティを実現する機器のマーケティング・商品企画・システム構築が専門分野。また大手モーターメーカーにも所属しDX化を提案し進めた経験を持つ。

現在、半導体業界国際規格団体SEMI (Semiconductor Equipment and Materials International)の国際標準化規格委員でもあり、日本地区トレーサビリティ委員会の共同委員長を15年間務めている。昨今の半導体不足問題による半導体サプライチェーンが注目を浴びている中、半導体サプライチェーンを管理する国際規格作成においては作成グループのリーダーを務めている。アメリカの規格委員とともに国際規格開発を中心的に進めている。半導体サプライチェーン管理や模倣品対策においても数多く登壇。

# INFORMATION

## 製造業、経営者、起業家向けのコンテンツが満載！ 大阪産業創造館のセミナー・イベント情報を配信するメールマガジン

<メルマガ登録用QRコード> それぞれ無料で登録できます。まずは下記 URL にアクセス！



<https://www.sansokan.jp/mlmg/>  
※ご登録にはユーザー登録が必要です。

### Mail Magazine [FA.COM]

### メールマガジン [ エフエイコム ] にご登録下さい！

FA.COM では定期的にメールマガジンを配信しております。自社ニュースから、「やさしく学ぶロボット導入」(第1巻～) CEO 対談特別記事など、様々な話題をお届けし、大変ご好評を頂いております。

お申し込みは下記登録専用フォームお申込み頂けますので、ご興味を持たれた方は是非この機会にご登録下さい。

メルマガ登録専用フォーム：

<https://forms.gle/MyWvDR4wgyanQEtz8>

<メルマガ登録用QRコード>



Follow us!! お気軽にフォロー♪

製造業の未来を盛り上げる各 SNS も運営しています。

株式会社オフィスエフエイ・コム

株式会社 FA.Regalo (FA.COM グループ広報マーケティング支援)

住所： 〒105-0004 東京都港区新橋 5 丁目 35 番 10 号新橋アネックス 2 階

TEL： 03-5860-1647

FAX： 03-5860-1648

FA.COM HP： <https://www.office-fa.com/>

FA.Regalo HP： <https://fa-regalo.com/>

E-mail でのお問い合わせはこちら： [contact@fa-regalo.com](mailto:contact@fa-regalo.com) (担当：杉本)

 Facebook  
@OfficeFAcom

 Twitter  
@OfficeFAcom

 Instagram  
@officefacom.official